二一世紀の人類の使命

社団法人　日本工学アカデミー　会長　中原（なかはら）　恒雄（つねお）

昭和5年8月生まれ。工学博士。CBE（名誉大英勲章）。昭和28年東大工学部卒、同年住友電工に入社。研究開発本部長、副社長等を経て平成3年副会長。現在、日本学術振興会監事、技術同友会代表幹事、中原総合研究所代表取締役。平成18年5月（社）日本工学アカデミー会長に就任。

現在二一世紀初頭であるが、今世紀中に環境の悪化と資源の不足から人類が破滅する恐れがあるとの警告が度々聞かれるようになった。直接の動機は炭酸ガスの過剰放射による地球温暖化と化石燃料・鉱物資源の枯渇の懸念である。この問題については、百年単位の考察が必要となる。数百年前の歴史をたどることはさほど困難ではない。しかし百年先の未来を予想することは簡単ではない。比較的容易なのは、人口予測、その次は科学技術、そしてこれを利用した産業予想であろう。最も困難なのは、人間及びその集団である人間社会の行動の予測である。しかしこの百年間に起こりうる人類の絶滅を回避するためには、是非ともこれらの未来予測に挑戦をせねばならない。これこそ二一世紀の人類の使命である。

人類にとりエネルギーや資源の不足に脅威を抱くようになった起こりは、一八世紀天才ニュートンの出現から、一九世紀にイギリスで産業革命がおこり工業化時代が始まったことにある。そして二〇世紀にアメリカを中心として情報通信革命がおこり、人類の活動範囲は飛躍的に拡大し情報産業時代を迎えた。更に二一世紀には、知能生命工学革命が起こり人類の健康寿命が延び、知的活動範囲は直接体験を超越して宇宙からミクロの世界まで拡大され、頭脳産業時代を迎えることになる。

以上は科学技術と産業の立場から眺めた話だが、夫々の時代の人々の事実認識と生き方の変遷はどうであったか。無知な人類は種の保存本能に任せて人口の加速度的増加を傍観してきた。その間に人類の生存に必要なエネルギーと資源の枯渇の危機が秘かに忍び寄ってきていたのである。特に大規模な人類社会では、俄に考え方を変えることが難しい。一旦人類絶滅の方向に向かうと、一握りの賢人・エリートの献身的努力ではどうにもならなくなってくる。遠い未来に対するリーダーの洞察力と実質的に世の中を動かす大衆の理解のみが人類絶滅の回避を可能にする。

人類の生存を確実にするには、エネルギー特に原子力・核融合がキーテクノロジーである。そして、衣食住に関わる様々の高度技術の開発と実用化に注力することが必要である。これらの技術が開発されたとしても、その使い方が人類の運命を決める。政治形態として民主主義が生き残るためには、過半数の有権者の正しい技術の理解が必須となる。国、企業、宗教などの組織と、人類の生存を可能にするグローバルな基準の間の利害調整も必要である。それぞれの専門家が愛国心・愛社心から、職業に対する忠誠心へと移行すべき時代となる。

二一世紀の人類の滅亡を未然に防ぐには、数々の画期的な技術開発を必要とする。そしてこれを使う人間社会が、正しく技術を理解して、その時代に適応するように社会を改革していかねばならない。このような観点から、（社）日本工学アカデミーでは、二一世紀における技術者の使命を痛感し、「環境と持続的成長」について、世界の工学アカデミーの会合を提案してきた。そして、二〇〇七年一〇月に東京新宿の京王プラザホテルで、国際工学アカデミー連合と日本工学アカデミーの共催で、シンポジウムを開催する手筈が整った。また国連等にも働きかけを始めている。関係各位の絶大なるご支援をお願いして筆を置きたいと思う。

次号は、（社）日本原子力産業協会会長、今井敬氏にお願いします。 ㊢

小長啓一 氏→野々内隆 氏 → 根來泰周 氏→石弘光 氏→武藤敏郎 氏→高橋温 氏→増田寛也 氏→ 西澤潤一 氏→内田盛也 氏→中原恒雄 氏